

研究の沿革

相田 満

《一》研究第二年度の総括

〔一〕『標題文芸』目次

研究初年度にあたる平成十四年度は、七回の研究協議を持ち、研究の進め方についてのほか、それぞれの研究分野における「標題」の問題点・意義などについて各分担者および研究協力者による報告・協議を重ね、その成果の一端は、本研究の中間報告書を兼ねる『標題文芸』という冊子にまとめた。すべて書き下ろしの論文で構成され、以下の目次で構成される。

『標題文芸』目次

◇研究の沿革（相田 満）（pp 1～5）

◇題名の文字数（入口 敦志）（pp 6～19）

◇俳書標題の意匠について

——『草』型標題を中心に——（安保 博史）（pp 20～32）

◇御伽草子の標題について（ノート）（渡辺 信和）（pp 33～69）

◇「標題」のさまざま

——現代と脱領域的な視点から——（相田 満）（pp 70～81）

◆「標題」雑話 ◆「標題」の付く書名①（相田 満）（p 8）

◆「標題」雑話 ◆「標題」の付く書名②（相田 満）（p 32）

◆「標題」雑話 ◆「標題」の付く書名③（相田 満）（p 69）

この内容は作品標題と目次標題の分析を主題とするものに大別され、それぞれ典型例の抽出作業と考察がなされた。

まず、作品標題については、近世仮名草子と戯曲、俳書、御伽草子それぞれの書名標題についての考察が行われ、奇数字数尊重の傾向の統計的実態調査（入口）、俳書の標題に見る文芸ジャンルのステイタスの問題（安保）、書名の命名原理を分析するために御伽草子を素材とした網羅的分析（渡辺）が試みられた。

目次標題については、類聚編纂物における部類のための見出し（部類標題）の継承性についての考察を試みられ、近年急速に注目を浴びつつあるオントロジ（知識概念木）についての考察と、和漢古典籍の世界における概念語を文化資源として意義づけることの可能性についてふれた（相田）。

〔二〕関連研究

本研究のような、和漢古典籍における「標題」に対して真正面から取り組んだ先行研究は、これまで皆無であった。

ただし、一步異なる学問領域に目を向けてみると、本研究に密接な関係を持ち得る文献は、さまざまな分野に散在しているようである。

たとえば、第一号刊行後に、佐々木健一『タイトルの魔力——作品・人名・商

品のなまえ学―』(中公新書一六一三、二〇〇一年)や森岡健二・山口仲美『命名の言語学』(東海大学出版会、一九八五年)などの文献の紹介を受けた。前者は美学の立場から、後者は国語(言語)学の立場からの考察である。本研究主題の体系化のためには、つねに幅広い分野に目を向けて、関連する文献の集積と目配りが必要だろ。研究期間終了年度の報告となる次号にては、まとめて文献紹介を行いたい。

また、「名前」「命名」などの原理をめぐっては、音楽・美術・登録商標など、古典時代から現代生活に至るまで、無視出来ない諸現象が、数多くある。なかには、コピーライターのように、命名行為自体が職業として成立していたり、命名作業自体を事業サービスとして行っている事業所もある。

その一端は『標題研究(壺)』において、相田が報告したが、さらには、近年、東京都が「東京スタジアム」(東京都調布市)の命名権(ネーミング・ライツ[Naming Rights])を売却し、「味の素スタジアム」と改名したという出来事もあった。同様に「神戸オリックススタジアム」も「Yahoo-BB スタジアム」と改名した。また、「阪神優勝」がすでに千葉県在住の某人によつて登録商標となっていたことが判明し、係争事件となつた出来事などもあった。

これらの事象は、現代における「標題」の問題が、情報化時代の象徴ともいえる、知的財産権との密接な関連性を示す典型例ともいえる。

【三】 研究組織・主題の拡張・分節化

「標題文芸」を扱う本プロジェクトに加えて、本年度より新たに「和漢古典学のオントロジモデルの構築」という研究主題に対しても基盤研究(B)の科学研究費助成(代表・相田満)をいただくこととなった。

前号報告書でも述べたとおり、「標題」と「オントロジ」(知識概念木)は、きわ

めて近接した概念であり、後者は前者を包含するものといえ、「標題文芸」における、「目次標題」「部類標題」という用語を使用したものが、「オントロジ」概念と重なる。ただし、「標題文芸」文学に対する助成であるのに対して、「オントロジ」は、総合系分野の情報学(人文情報学)分野におけるプロジェクトという違いがある。

もともと、双方とも多様かつ根元的な問題をはらむゆえに、研究の方向性は、相当に輻輳した部分が出てくる。オントロジ研究においては、その特性として「内容指向研究」ということが謳われている通り、それを和漢古典学におけるオントロジ・モデルを構想するためには、その主対象となる類聚編纂物の構成原理に関する考察が不可欠である。

それゆえに、両プロジェクトの研究メンバーには、和漢古典学にかかわる文学研究者を主として組織し、双方の研究プロジェクトに関与してもらうこととした。さらに、情報学の立場から図書館システムに関わる研究を進めるメンバーも加えたことにより、研究プロジェクトは、相当に学際的様相を強めつつある。研究協議の場はつねに熱気を帯び、時間を忘れての活発な意見がかわされた。その一端は、協議事項の抄録として、本冊と別の報告書『和漢古典学のオントロジ』に掲載した。あわせて参看していただきたい。

《二》 研究第二年度(平成十四年度)の研究組織

【研究代表者】

相田 満(国文学研究資料館・研究情報部助手)

【研究分担者】

安保 博史(群馬県立女子大学・文学部助教授)

入口 敦志(国文学研究資料館・研究情報部助手)

長崎 健(中央大学・文学部教授)

山田 直子(国文学研究資料館・整理閲覧部助手)

渡辺 信和(同朋学園・仏教文化研究所研究室長)

【研究協力者】

坪 美奈子(日本大学・非常勤講師)

江戸 英雄(国文学研究資料館・研究情報部助手)

藏中しのぶ(大東文化大学・外国語学部教授)

後藤 幸良(相模女子大学・短期大学部)

佐伯 雅子(人間総合科学大学・人間科学部助教授)

塩野 友佳(筑波大学・大学院生)

谷本 玲大(相模女子大学・非常勤講師)

中島 和歌子(北海道教育大学・社会言語教育系助教授)

朽尾 武(成城大学・文学部・教授)

林 毅(バリアフリー・取締役社長)

原 正一郎(国文学研究資料館・研究情報部助教授)

【研究補助】

根本 優(成城大学・大学院生)

《三》 研究課題

【研究課題名】和漢古典籍における「標題文芸」の基礎的研究

The Fundamental Research about "The literature act of a title" which is visible to the Classic Books of Japan and China

【研究種目】萌芽研究

【研究領域】文学(国文学)〔領域番号二四二〕

【研究期間】二〇〇二年度(平成一四年度)～二〇〇四年度(平成一六年度)

【課題番号】一四六五一〇七八

【二〇〇二年度研究費】一三〇万円

【二〇〇二年度研究費】一一〇万円

《四》 研究目的

〔一〕本研究の研究目的〔平成十四年度 萌芽研究
研究計画圖書(新編)より〕

(一)萌芽研究で申請する理由

本研究は、「作品表題」(Title)や「目次標題」(contents)などの、およそ知的成果物に不可欠な「標題」の意匠について、和漢古典籍を対象に、分析・分類作業を試みるものである。

分析対象を古典籍に限定する理由は、「標題」の意匠に関する評価言説が多数取材可能なこと、「標題」自体が独立した作品も通行していたことなど、文化的継承性・表現技術・評価言説の諸点で、現代の作品以上に多様な典型的事例が期待されるからである。

そもそも「標題」には、作品世界の論理が凝縮されるだけでなく、その枠に

収まり切れぬ言語遊戯的興趣も確認される。とりわけ、「目次標題」には、日本独自の文芸形態である連句・連歌にも通底する連纂の技法もうかがえ、流派・門閥とは全く無縁で自由な表現世界でありながら、きわめて濃厚な文化的継承性が現れている。

しかし、このように特異な文芸現象に着目する先行研究が皆無なのは、従来の「近代的」価値観の枠組みに囚われすぎ、多様な資料群を横断的・マクロ的に捕らえる視点の欠如によるものではあるまいか。

そこで、上述の観点による分析を試み、「標題」に潜む「文芸」性の定立を求めたい。

(二) 研究の背景（着想に至った経緯等）

申請代表者は、二十年来『蒙求』の体裁に倣った標題揭示型類書の収集と分析に取り組んで来た。（『蒙求』型人物故事類書の書承に見る日本文学への影響に関する研究「H7奨励研究(A)、代表：相田満」他）。さらに数年来、申請者を中心に和漢古典の知識型類聚編纂物の分類概念項目語彙（概念木Ⅱオントロジ）の収集と分析作業を行ってきた（和漢古典分類語彙の階層化に関する基礎的研究「H10萌芽的研究、代表：相田満」）。

これらの研究を発展的に継続させる中で、「作品標題」における一字・一句の語義と継承性、「目次標題」引用・パロディ、定型句化、押韻などの言語遊戯が、かかる「標題」に散りばめられた作品が顕著に認められ、配列の妙と相俟って、かかる行為に対する賞賛的言辭や批評的言説も産み出されていることから、「標題文芸」なるコンセプトの基に体系化を試みる必要を痛感するに至り、ここに新たなプロジェクトを企画した次第である。

(三) 研究目的

本研究では、「作品標題」と「目次・評語標題」の分析の二系統で分析作業を進めたい。

まず、「作品標題」の分析作業では、国書総目録や中国典籍国書の古典籍に関する書名の電子化データを使用して、書名に使用される文字・語句の頻度分析結果を抽出。これを基礎として、継承関係の大綱と、詳細な文化的影響関係を求める。

次に「目次標題」については、典型的事例の抽出と分析作業により、その意匠の分類と、評価言説の分類を中心に進める。なお、これらの中には詩歌の文芸創作行為と密接に関わるものも少なくないことから、かかる文芸作品から標題が抽出・配列されるに至る一連の文芸行為の過程をモデル化して示すことにも取り組みたい。

(四) 当該分野におけるこの研究（計画）の学術的な特色・独創的な点及び予想される結果と意義

「標題文芸」という観点から、その配列規則と字義の継承性を総括的・系統的に分析する試みには、未だ先例がない。そこで、本研究で開発される研究手法と、基礎データは、広く公開に供することを予定している。このことにより、文学はもとより図書館情報学、認知科学、知識工学など、さまざまな面で有益な成果が提供できると予想する。なかでも、情報処理と文学教育との融合的教育プログラムの観点においては、格好の演習教材となろう。

(五) 国内外の関連する研究の中での当該研究の位置づけ

書名そのものの継承性に関する研究で体系的なものは存在せず、作品内に

おける連纂手法に着目する研究は、俳諧・連歌を除けば、『古今和歌集』や『今昔物語集』に関する研究を嚆矢とする和歌・説話文学研究に見受けられる程度である。また、「目次標題」を独立させた作品については、従来教訓の一環として扱われ、内容に踏み込んだ論究はなかった。

しかし、これらの研究も、本研究で予定されるごとく、言語文化の総体の枠組みの中で、系統的に位置づけられるべきであろう。本研究は、その意味でも、活発な議論の土台となることが期待される。

【二】平成十四年度の研究目的【平成十四年度科学研究費補助金（萌芽的研究）交付申請書より】

本研究は、人間が長い歴史をかけて生み出し続けてきた知的・文化的活動の生成物に必ずしもいってもよいほど存在する「標題」に、「文芸性」の意義付けと確立を求めることを目的とする。そこで、本研究では、「標題」の意匠を「作品表題」(Title)と「目次標題」(contents)とに大別して、分類・分析作業を試みたい。

分析対象は、基本的に和漢古典籍を中心とする。これは、「標題」の意匠に関する評価言説が多数取材可能なこと、「標題」自体が独立した作品も通行していたことなど、文化的継承性・表現技術・評価言説の諸点で、現代の作品以上に多様な典型的事例が期待されるからである。

ただし、研究の進展を期するためにも、現代的視点と素材、および国際比較的な観点も考察の対象したい。

《五》平成十四年度～十五年度開催の共同研究会記録

◎第一回

【開催日】平成十四年五月二十七日(月)

【場所】国文学研究資料館相田研究室

【参加者】相田・入口・山田

【協議事項】

①研究の進め方について(協議)

②古典戯曲標題の奇数尊崇態度について(協議)

③媒体と標題の文字数について(協議)

◎第二回

【開催日】平成十四年六月十七日(月)

【場所】国文学研究資料館相田研究室

【参加者】相田・入口・山田

【協議事項】

①古典戯曲標題の奇数尊崇態度について(報告「入口」)

②教育教材の開発について(協議)

③『類聚国史』の編纂意識について(報告「相田」)

④「随筆」という標題・ジャンルのターミノロジについて(協議)

⑤「注釈」のオントロジについて(協議)

◎第三回

【開催日】平成十四年七月十五日(月)

【場所】国文学研究資料館相田研究室

【参加者】相田・入口・山田

【協議事項】

① 脚本・浄瑠璃・浮世草子の標題字数調査(報告「入口」)

② 教育教材の開発：学生の夏休み課題に標題文芸についての調査・分析を課したこと(報告「相田」)

③ ジャンルと文体との関係について(協議)

◎第四回

【開催日】平成十四年八月二十六日(月)

【場所】国文学研究資料館相田研究室

【参加者】相田・江戸・山田

【協議事項】

① 和漢古典学のオントロジ(報告「相田」)

② 現在通行の古典注釈書の見出しの淵源について(協議)

◎第五回

【開催日】平成十四年九月二十七日(金)～二十九日(日)

【場所】福岡県久留米市および太宰府天満宮

【参加者】相田・安保・長崎

【協議事項】

① 研究の大綱と計画の進め方について(協議)

② 俳諧の書名意識について(協議)

③ 歌集の書名意識について(協議)

◎第六回

【開催日】平成十四年十月七日(月)

【場所】国文学研究資料館中会議室

【参加者】相田・安保・入口・江戸・山田・渡辺

【協議事項】

① 研究の大綱・計画の進め方・問題提議(協議)

② 脚本・浄瑠璃・浮世草子の標題の奇数時尊崇態度(報告「入口」)

③ 俳書における「標題」の意匠について(報告「安保」)

◎第七回

【開催日】平成十四年十二月八日(日)～九日(月)

【場所】すわ湖苑(長野県諏訪市)

【参加者】相田・入口・安保・江戸・長崎・渡辺

【協議事項】

① 中間報告書の作成について(協議)

② 現代における「標題」(報告「相田」)

③ 御伽草子の標題について(報告「渡辺」)

◎第八回

【開催日】平成十五年七月二日(水)

【場所】国文学研究資料館大会議室

【参加者】相田・江戸・蔵中・後藤・佐伯・塩野・枋尾・長崎・中村・林・原・山田・渡辺

【協議事項】

① 研究プロジェクトの趣旨説明・メンバー紹介・経過報告

② 研究発表・討議

○ ネットワーク統合型データベースによる東アジア資料の共有化に関する研究(報告「原」)

○ 「標題学」方法序説(報告「相田」)

○ 和漢古典学におけるオントロジ・モデルの構想(報告「相田」)

◎第九回

【開催日】平成十五年十一月十六日(日)

【場所】同朋大学知成館

【参加者】相田・坪・安保・江戸・蔵中・佐伯・谷本・朽尾・長崎・原・山田・渡辺

①開会の挨拶(相田)

②事務事項確認

③参加者自己紹介

④研究発表・討議

○ネットワーク統合型データベースによる東アジア資料の共有化について(原)

○『山海経』と猿について(朽尾)

○国立中央図書館台湾分館の和書調査報告―典拠の参照を中心に―(山田)

○仏典における和漢古典学のオントロジモデルの構築―唐・長安西明寺の学僧の類聚的編纂物のもつ有機的關係から―(蔵中)

○『田舎』冠称型標題の一視点(安保)

○近世初期の笑話本と標題文芸(入口)

○『本朝麗藻』の標題文芸(佐伯)

○標題文芸―『枕草子』をめぐる(坪)

○同朋大学仏教文化研究所寺院襲藏物データベース―相田・渡辺による共同作成―デモンストレーション(渡辺)

◎第十回(開催予定)

【開催日】平成十六年二月十六日(月)

【場所】国文学研究資料館

《六》補遺：研究第一年度(平成十四年度) 研究協議摘録

研究第一年度(平成十四年度)の協議内容から、いくつかを以下に摘録する。

概して、話が盛り上がると記録の方がおろそかになるもので、本記録の分量に粗密が生じたのは、記録者である相田の責任である。記録が十分でないからといっても、内容が低調であったということでは決してない。

各会合で上った話題は多岐にわたったが、実証作業に相当の手間がかかるため、現段階では、思いつきにとどまるものもある。それでも敢えて記したのは、今後、同じ話題と内容を延々とくり返すというトートロジに迷い込むことを回避するとともに、この摘録が、将来の研究の種として、いつか芽生えることもあらんことを期待してのことである。

〔一〕古典戯曲標題の奇数尊崇態度について(第一回協議)

歌舞伎の題が、奇数を尊ぶと言われるが、果たしてそれは本当だろうか。

このことを具体的に調べるためには「国書基本データベース(<http://base4.niji.ac.jp/~koten/pub/ikdb.html>)」の検索を利用すれば実現可能である。

よって、当該データベースの「分類」・「年代」の検索フィールドを利用し、「脚本」で検索したところ、五〇四三個が見つかった。しかし、システムプロテクトにより、データ表示が最初の三千個だけの出力に制限されてしまい、全件を出力することは不可能であった。しかも、出力に至るまでのレスポンスはきわめて悪い。

そこで、対処方法として、「よみ」の前方一致で「あゝん」(件数が多い場合は「あゝんん」)までの検索を繰り返し、適度な分量で一件一件繰り返しコピーして貼り付けていく方法が最も現実的ということがわかり、その手法でデータの採録を行うことにした。

【二】媒体と標題の文字数について(第二回協議)

媒体により標題の文字数が制限されることがあるか。

(たとえば芥川龍之介の『侏儒の言葉』は、いかにも雑誌巻頭に据えられるべきタイトルだが、)雑誌のように、作品が掲載される位置によって、標題の表現が規定されることはあるだろうか。

あるいは新聞小説はどうだろうか。横長形式の小説の場合、原稿用紙もその欄に合わせる必要がある。そうした場合の標題命名行為には、何がしかの規制が働かないだろうか。

【三】古典戯曲標題の奇数尊崇態度について(第二回協議・報告「入口」)

前回話題となった、文禄から享保までの浄瑠璃外題の文字数について、入口が調査報告を行った。その結果、時代が下ると奇数に落ち着く傾向があり、巷間言われる奇数尊重現象は確かに成り立つことが、統計から見えたきた。

ただし、伝統的な題目(たとえば、伊勢物語などの伝統的書名、謡曲などにすでにあるもの)の影響下にあるものを除外する処理が必要であろう。

今後は、享保以降までも視野に入れるとともに、歌舞伎演目などのような分野を替えての再調査も考えたい。

【四】タイトルの字数という問題(第二回協議より)(協議事項)

演目タイトルの字数意識の調査を通して、奇数を尊崇する習俗があることはほぼ実証できたが、なぜ奇数が喜ばれるか、その文化的背景には謎が残る。時代的特徴をさらに細分化して、たとえば、近松とそれ以外はどうかなど、この調査から発展する課題は多いようだ。

【五】教育教材の開発(第二回協議より)

本研究では、コンピュータを使用した調査や統計処理、テキスト処理なども頻用されるだろう。しかし、無数に存在する標題すべてを考察大正とすることは不可能である。そのため、研究は、典型例をサンプリングとして採りあげることにより、研究の可能性と方法論を提示するにとどまらざるをえない。

ただし、それでも、本研究が先例のないものであるという性質上、研究遂行時の具体的手法(ノウハウ)や、途上に作成されたデータも、価値ある成果として十分に評価されるべきものと考える。したがって、研究の背景を支えた中間データも研究資源のひとつと位置づけ、共有化を心がけたい。

また、本研究行為をもとに、学生・生徒に演習問題を課することを試みることも意義あるものといえよう。近年の教育機関における人文系古典学にかかわる教科目の振興の一助になるのではないか。あるいは、本プロジェクトにおける各研究を、素材を変えて追体験することが可能な教案を作成することも有益だろう。

【六】『類聚国史』の編纂意識(第二回協議・報告「相田」)

本報告の内容については、(財)無窮会東洋文化談話会研究発表大会(平成十四年十一月十日「日」)にて発表を行った。時間的關係もあつて成稿に至らなかったが、以下にその発表要旨を記す。

『類聚国史』は、本来二百巻からなっていたと考えられるが、現在は本文六十一巻と、若干の逸文が時折発見・報告されるのみでその過半の構成さえも不明である。しかし、その評価は高く、日本では中国有数の「類書」と対置されるほどのものに位置づけられていた。

『類聚国史』の欠巻部分を推定することは、これまで逸文と部門の注記を手掛かりとして進められてきた。その最新成果は、『国史大系書目解題』下巻「〔類聚国史（吉川弘文館、二〇〇二・二・二）〕」に吉岡真之氏により、従来の研究を整理して記載されるとおりで、総計百四十巻分の部立てが復元されている。

本発表では、それに加えてこの度新たに見つけた無窮会図書館蔵『勢多本類聚国史目録』〔神智文庫二二五六号〕により、新たに二十巻分の部立てが判明したので、総計百六十巻分を検討の対象としたい。

該書は、後補表紙外題「勢多本類聚国史目録」と直書され、内題「類聚国史目録」と記される、縦二二・七cm×横一六・六cm全十三丁の写本である。著者は中原章武、『平安人物志』によれば烏丸中立亮に住み、勢多大判事と呼ばれた。奥書に「天保十三年」〔一八四二〕「壬寅臘月初冬以買得之本引合了」とある。全二百巻の目録を立て、自身が入手した九十五冊と、「陽明家」、「逸史」、「容塾」、「佐野家蔵」、「鴨林家」、「東本六十一冊」を基に、朱・橙・青・紺・黒筆を使用してそれぞれに部立・項目を埋める。

亡佚巻の部立については、これまで坂本太郎氏をはじめとして、『類聚国史』内に記載される逸亡項目や、稀々に発見される逸文を基礎に推定されることが専らであった。

しかしながら、無窮会図書館神智文庫蔵『勢多本類聚国史目録』に記載される内容を検討した結果、新たに二十巻分の部立が未報告のものである。

とが判明し、既存の研究成果とあわせれば総計百六十巻分の部立が明らかとなる。

本発表では、まず当該資料を紹介するとともに、その可能性を検討する。また、そこからさらに『類聚国史』の部立てがどのような配列原理で設定されたかということについても考察を進めたい。すなわち、『類聚国史』の配列原理が、それを使用する際の便宜を図るためになされたのではないかという視点に立ち、二官八省の組織を円滑に機能せしめるべく工夫されたという仮定を設定したい。いわゆる二官八省の配列原理で『類聚国史』の配列規則が読めるのではないかということである。そして、その観点をもとに『類聚国史』の意義づけを試みたい。

同様の規則にはほかにも見つかろうと、汎用性のある事象といえるだろう。

『類聚国史』の「類聚」という言葉の使用例はどうだろうか。現在の所、初出は「類聚歌林」と言われる。これも不思議な言葉で、「類」「聚」「林」いずれも「あつめる」という行為を示す語句となっている。「歌」を「あつめる」ことを三重に強調しているわけである。

また、国書データベースを使用したところ、「類聚」では一〇七九件のヒットを見た。

ちなみに「類従」は、三六件。これは『群書類従』の影響下にあると判断してよさそうだ。では、「類聚」と「類従」はどう異なるのか、これは後日の課題としておく。

〔七〕「随筆」のターミノロジ（第二回協議）

江戸期の考証随筆はなぜ分類されていないのだろうか。

考証随筆、あるいは単に随筆といつていいかもしれない。この類に分類される典籍は、抜き書き、ノートの端から書き留める場合が多く、残存する典籍にも貼り紙・切り抜きや、ことなる料紙が交じつたものが少なくなく、整齊されたものの方が貴重である。

元来、随筆は当人にとつての覚えるためのメモに過ぎず、書き抜いたものを繰り返し読んでいたものが残されたと考えるべきだろう。著者にとつては、二次情報として使用される情報のエッセンスが重要だったわけである。しかも、こうした情報は、残されていれば、子孫の知的資源となる。いわば、公家日記と同等の機能を果たしていたのだろう。

そのためか、出版ベースにのつたものは極めて少ない。

なお、「随筆」という言葉は中国に起源が求められ、宋・洪邁『容齋随筆』に、

意の之く所、随つて即ち記録し、因りて其の後先、また詮次無し。故に之を目して随筆と曰ふ」

とあるように、心に任せ、配列に拘泥せず「随意に記録」されたところから「随筆」の語が起つてゐる。